【翻　訳】

「ルカノール伯爵」（1）

ドン・ファン・マヌエル
木原太源訳

凡例

一、本書は、ドン・ファン・マヌエルの『ルカノール伯爵とパトローニオの教訓談の書』の翻訳である。

二、底本には、十五世紀の文字で筆写された写本（スペイン国立図書館蔵第六三七六番）を校訂翻刻したホセ・マヌエル・ブレクワ版『ルカノール伯爵すなわちルカノール伯爵とパトローニオの教訓談の書』（一九七一年第二版、マドリッド）を用いた。

三、本書の近代スペイン語訳では、エンリケ・モレノ・バエスの『ルカノール伯爵』（一九七四年第七版、マドリッド）を参考にした。

四、固有名詞の仮名書は、できるだけ原音に忠実な方法をとったが、スペイン語以外の固有名詞の中には、わが国で知られている表記法を用いたものもある。

五、注解を必要とする個所には番号を付して、末尾にまとめた。

翻訳のテキスト

底本 Don Juan Manuel *El conde Lucanor o Libro de los ejemplos del conde Lucanor et de Patronio*, edición, introducción y notas de José Manuel Blecua, Editorial Castalia, Madrid, 1971. (Primera edic. 1969)

近代スペイン語訳本 Don Juan Manuel *El conde Lucanor*, en versión española moderna de Enrique Moreno Baez, Editorial Castalia, Madrid, 1974. (Primera edic. 1953, Valencia)

英語訳本 Don Juan Manuel *Count Lucanor, or the fifty Pleasant tales of Potronio* translated by James York, M. D. with an introduction by J. B. Trend, Hyperion Press, INC., West port, Conneticut, 1978, (reprint edition).

参考文献

Félix Huerta Tejadas *Vocabulario de las obras de Don Juan Manuel*, separata del Boletín de la Real Academia Española (Tomo XXXIV, 1954, cuadernos 141-143.—Tomo

XXXV, 1955, caudernos 144-146.—Tomo XXXVI, 1956, cuaderno 147.), Madrid, 1956.
Andrés Giménez Soler *Don Juan Manuel, biografía y estudio crítico*, Zaragoza, 1932.

本書は、ドン・ファン、いと高貴なるドン・マヌエル親王の子が著わした。その意図は、人々がこの世において己の名誉・財産・身分の向上に役立て、魂を救済し得る道へさらに近づくように功徳を施すことを願ってである。そこで本書には、記述せし事を人々が実行できるように、様々な出来事から会得したこの上もなく有益な教訓談を書き記した。

何時か、誰かに持ち上がる出来事も、かつて、他の人にも生じた出来事であることを、必ずや本書の中で見出すであろう。

ところで、ドン・ファンは書物が筆写される際には多数の誤謬が生じることを知っている。事実目にしたこともある。何故ならば文字は互いに類似していることから、筆写している時に他の文字と混同すれば、言葉はまったく変り意味が取り違えられることになるからである。すると、後日その誤謬を見出す人は、それを著者のせいにするのである。ドン・ファンはこれを危惧するが故に、彼の作品の写本を読む人に、たとえ誤った言葉を見出してもドン・ファン自らが多数の個所に訂正を施している原稿に目を通されるまでは、著者のせいにしないでいただきたいことをお願いする。

彼がこれまでに書き著わした書は次のごとくである。『要約年代記』①、『賢者の書』②、『騎士道の書』③、『王子の書』④、『騎士と従者の書』⑤、『伯爵の書』⑥、『狩猟の書』⑦、『武器の書』⑧、『詞の書』⑨、これらはペニャフィエル⑩にて彼が建立した宣教師のための修道院にある。ところで、彼の著述になるこれらの書を読む人は、その中に誤謬を見出しても著者の意図のせいにしないで、著者の理解の至らぬが故とお考えいただきたい。何故ならば、非常に高度な問題を敢えて論じたからである。しかしながら、神は著者が学識のない世間一般の人々に役立つようにとの考えから本書を著わしたものであることを御存知である。そこで著者は作品を総て口語で記述した。これは、著者と同様に知識に乏しい俗人のために書き著わしたという確な証である。これより『ルカノール伯爵と、パトローニオの教訓談の書』の序が始まる。

神の御名において、アーメン。われらが主なる神はこれまでに数々の摩訶不思議な事をおやりになってこられたが、その中でも特にやってみようとお考えになられた非常に不思議な事がひとつある。それは、この世には大勢の人間がいるにも拘らず誰ひとり他人と同じ顔立の者はいない、という事である。つまり、人は皆互いに同じものを顔に持ってはいるが、顔立そのも

のは互いに似て非なるものであるからだ。ごく小さなものである顔には、人間の考えや性質が持つあの驚嘆すべき相異ほどではないが、著しい相異がある。御承知のように、誰ひとり他人とまったく同じ考えや性質を持つ人はいないのである。さて、さらにお分りいただくために二つ三つ例を挙げることにする。

神を愛し、神に仕えることを願う者は皆ひとつの事を望んでいる。しかしながら人は皆ひとつのやり方で神に仕えはしない。各人が各々のやり方で仕えるのである。また、臣下は皆主君に仕えるのであるが、ひとつのやり方で皆仕えはしない。耕す者、家畜を飼育する者、技を競う者、狩をする者、その他あらゆることをする者皆各々の仕事をするのであるが、ひとつのやり方で考えそして行うものではない。この例からも、述べると非常に長くなるその他幾つかの例からも、人は皆人であり、そして人は皆各々の考えや性質を持っているのではあるが、顔立におけるのと同様に、同じ考えや性質を持つ者はほとんどいないことがお分りになる。しかしながら、人は皆何よりも満足を与えてくれるものを喜んで使い、手に入れようと欲し、そして学ぼうとする。この点に関しては、人は皆同じ考えを抱くのである。人は最も満足を与えてくれるものを喜んで学ぶ。故に、ある事を他人に教えようとする者は、それを学ぶ人が最も満足すると思える方法で教えなければならないのである。その上、大方の人は難しいことを受容することなど出来ないのである。つまり、難しいことはよく理解(わか)らないのであるから、書を読むことにも、書に述べられていることから学ぶことにも喜びを見出すことはない。彼らはそこに喜びを見出さないのであるから、自分に役立つように学び取り、理解することは出来ないのである。

故に、予、ドン・ファン、ドン・マヌエル親王の子、ムルシア王国及び辺境領大総督は最も適切な言葉を用いて本書を著わした。また、物語の中には本書を読む人の役に立つであろう教訓を挿入した。それを薬師が行う処方を用いて行ったのである。つまり、薬師は肝臓に効く薬を調合しようとする時、肝臓が甘い物を好む性質を用いて、肝臓に投薬する薬に砂糖か蜂蜜、或はその他諸々の甘味物を混入するのである。すると、肝臓は甘い物を好むが故に、それを取り込もうとする。その時、それと一緒に肝臓に効く薬も取り込んでしまうのである。同じ事が、薬を必要とする何れの臓器にも行えるのである。何故ならば、元来臓器には各々が好んで受容する物があり、それを薬に混ぜればよいからだ。このように、本書は神の恩恵を得て著わされるであろう。故に、本書を読む人が自らの役に立つ種々(くさぐさ)の事を見出し、それらを喜びとするならば申し分のないことであろう。また、本書を十分理解しない人でも読み続けて行くと、快い美しい言葉を見出すことになる。すると、それらの言葉と混交している役に立つことも読まざるを得なくなるのである。たとえ自らは望まなくとも、肝臓や他の臓器が各々の好む物が混入されている薬を利用するように、人は自らの役に立つ

ように利用することになるであろう。総ての善行の遂行者たる完全なる神は恩恵と慈悲の御心から、本書を読む人が神への奉仕と魂の救済及び肉体の利のために、本書を役立てるように願っておられる。また、神は、予、ドン・ファンの意図することもここにあることは御存知である。

ところで、拙ない言葉遣いが散見されようとも、それを著者の意図のせいにはせず、理解の至らぬが故とお考えいただき、もし巧な表現や有益な言辞が目に留れば、神に感謝していただきたいのである。何故ならば、神がその善き言動の総てを語られ、かつ行われるお方であるからだ。

ここに序文を終え、これより、ひとりの偉大なる君主が彼の助言者と語る、という形式を用いて物語を始めることにする。君主をルカノール伯爵、助言者をパトローニオと呼ぶ。

第一話　「ある王とその大臣に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵が助言者パトローニオと余人を交えずに話をしておられることがあった。伯爵はパトローニオに次のように語られた。

「パトローニオ、令名が轟き、富も権勢もいと高く、予と親密なる間柄を無上の喜びとお考えのお方が、つい先頃内密に予に打ち明けられたことがあった。その話とは、これまでにそのお方の身に降りかかった様々な出来事により、所領を離れ二度と戻らぬ所存の由。かねがね予に好意と多大な信頼の念を寄せられていることから、自ら購われた領地と先祖伝来の領地からなる所領の総てを予に任せたいとの御意向なのだ。それがそのお方の御所望であるからには、予にとって至極名誉であり、有益であると思えるのだが、この件についてお前の考えを述べ併せて助言を与えてくれ。」

「ルカノール伯爵様」と、パトローニオは返答した。「私の愚見など申し上げるまでもないことと承知致してはおりますが、この件について私の考えるところを述べ併せて助言を与えよとの仰せにより、早速申し上げることに致します。先ず初めに、殿が御自身の友とお考えのあのお方が打ち明けられましたことは、ただ殿をお試しなさらんがために仰せになられただけのことである、と申し上げておきます。そのお方のことで殿に持ち上がりました出来事は、ある王とその大臣に生じました出来事に類似致しております。」

ルカノール伯爵はパトローニオに、それがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「殿」とパトローニオは語り出した。「ある王がおられました。王には心から信頼を託せるひとりの大臣がおありでした。幸運を擁む者は他人の嫉妬から逃がれることが出来ないよう

に、大臣は王の寵愛を得併せて幸運にも恵まれておりますことから、他の大臣達がひどく妬み、御主君である王に彼のことを中傷したのでございます。ところが王はそのような事は歯牙にもかけられず、大臣と彼の忠勤に対して疑心を抱かれることはなかったものですから、彼らの思惑は完全に外れてしまったのでございます。万策尽きて他に望を遂げる手だてがないのを知ると彼らは、『大臣は王の崩御をもくろんでおり、さらに幼少の王子様を自らの掌の中に入れるや王国を奪取せんものと、すなわち王子様を殺害して己が国王になろうと夢中になっております』と巧みに王の耳に吹き込んだのでございます。これまでは王の胸中に大臣への疑念を差し狭むことなどまったく出来なかったのでございますが、これ以後、御心に大臣への疑念が忍び入ることは如何ともなしがたいことでございました。ひと度行われますと、取り返しのつかない大変な危険を孕む事柄に対して、思慮ある者は〝用心に網を張る〟如く、それからは大臣に注意を払われることになり、心も安らかではなくなられたのでございますが、とにかく事の真否が判明するまでは策を講ぜずにおこうとお考えになられました。

そこで大臣を中傷しておりました連中は、『申し上げておりますことは真実でございます』と、それを証明する手だてを虚言を弄して巧に王の耳に吹き込んだのでございます。そして、『このように大臣とお話し下さいませ』と、これより殿に申し上げますことを再び虚言を弄して王の耳に入れたのでございます。そこで王はお試しになることを御決心なされ、御実行に移されたのでございます。

それから数日経って、王は大臣とお話なさっておられた機会をとらえられますと、人の世にすっかり愛想が尽き何もかもが空しく覚ゆる心境であることを、それとなく大臣に悟らせるべく洩らされたのでございます。しかし、その時はただそれだけのことでございました。

数日後、再び大臣とお話をしておられました時、他の話の序にたまたま持ち出されたかのように、『日々人の世とその習慣に厭わしさが募る』と吐露されたのでございます。それからというものは、毎日繰言のように御自身の気持を述べられたものですから、とうとう大臣は王がこの世の名誉や富、それにいかなる徳や心楽しいことにも喜悦びをお感じになってはおられないことを悟ったのでございます。大臣がすっかり企にはまったことをお悟りになると、ある日王は、『世を捨て、国を捨て、異国の地へ、罪の贖いをすることの出来る人里遠き無縁の地を求めて旅立つ考えである。それにより、神は予が天国の栄光を得るように、恩恵と慈悲の御心をお示し下さるであろうからだ』と、打ち明けられたのでございます。大臣は王のこのようなお考えを聴くと非常に驚きましたが、直ちに、『それを御実行に移されてはなりませぬ』と言葉を尽して説得致しました。『もしおやりになれば、それは平和と正義の下で守ってこられました王国内の民をお見捨てになることであり、神を侮る最大

の行為となりましょう。また、御国をお捨てになれば、たちまち民の間には暴動や争いが起り、そうなれば御領地の荒廃は間違いございません。神はそのようなことを最大の背信行為とお考えになられるでありましょう。それでもなお、御実行に移されるおつもりならば、どうか王妃様やいまだ幼少にあられます王子様のことをお考えになられまして、お止めなさるべきでございます。お二人のお生命と王国は大変危険な状態に陥ることは間違いないからでございます』と説得を続けました。王はこれにお応えになられ『予は国を去る覚悟を定める前に、常しえに妻子が民から尊崇され、併せて王国全体が万全な状態であるように、国の秩序が保たれる方法を熟考した結果このように思い至った。言うまでもなきことだが、お前を今日あるひとかどの人間に仕立て上げ何くれと無くお前の為になることを行って参ったのは王であるこの予だ。それに報えて、お前は常に忠義に厚く、誠心誠意よく尽してくれていることは熟知しておる。だから予は誰よりもお前を信頼しておるのだ。そこで、予は妻子をお前に任せ併せて王国内の出城と邑の総てをもお前の手に委ねるのがよいと判断した。こうすれば誰ひとり王子に仕えるのを止めることなど出来はしないからだ。もし何時か予が帰国しても、お前に任せておけば総てが無事に取り仕切られていることは間違いない。よしんば予が亡き者になろうとも、お前は予の妻たる王妃によく仕え、王子を立派に育て上げ、彼がしっかりと国を統めることが出来る日まで、王国を安泰な状態にしておいてくれることは明々白々だ。これが予の保持する一切の物を万全にしておけると考えた理由だ』と仰せになられました。

大臣は王国と王子をお前に任せたいとのお言葉を耳にして、王の真意を測りかねましたが、心中は嬉しさで一杯でございました。そして総てが己の手中に入れば思いのままに振舞うことが出来よう、と考えておりました。

ところで、大臣の邸にはひとりの囚人がおりました。彼は学識豊かな人物であり、偉大な賢者でございましたので、大臣は自ら処理しなければ ならない 任務や、与えねばならない 助言を、この囚人から受ける助言に従って行っていたのでございます。

大臣は王の下を辞すると直ちに囚人の所へ赴き、これまでの王との間の経緯を詳しく語りました。その上、全王領と王子とを彼に委ねたいとの王の御意向に接し、身の幸を心から嬉しく思い、満足していることを隠そうとはしませんでした。囚の身の賢者は御主人が王との間の経緯を詳しく語るのを聞くと、王子と王領を己が物にしたいと願う御主人の胸中を王がお察っしになられたことを悟り、御主人を厳しくたしなめ始めたのでございます。『王が仰せになられましたことは総て王の御本心から出たものではなく、御主人に悪意を抱くあの大臣方が、―このようにお話しなされまして大臣をお試し下さいませ。さすれば、奴めが喜ぶことがお分りいただけますから―と、巧に王に

持ち掛けた企(たくらみ)であるからでございます。御主人のお生命と財産はとても危険な状態にあることは間違いございません』と、主人の生命と全財産はまさに風前の灯の状態にあることを告げたのでございます。

事の真相を知らされました大臣は愕然となりました。総ては囚人の言う通りであることを心の底から思い至ったからでございます。大臣邸にいる賢者は、御主人の悲嘆にくれる容子を見ると、この危難から脱け出す手だてを講じるように助言致しました。

その手だてとはこうでございました。早速、大臣はその夜外出すると、頭髪と顎鬚を剃り、おまけにつぎはぎだらけの汚い着物と錫杖、それにところどころ穴が開いてはいるものの鋲でしっかりと補強された靴とを探し求めたのでございます。そして、つぎはぎだらけの着物の縫い目の間には多量の金貨を差し込みました。大臣は夜が明ける前に王宮へ出向くと門衛に、『他の者が起き出す前に出立出来ますようお目覚め下さいませ。私はここでお待ち申しておりますから』と、ごく内密に王に申し上げてくれるように命じました。門衛は大臣がこのような身装でやって来たのを見て驚きましたが、王の御寝所へ行き、大臣が命じた通りのことを奏上致しました。これには王も非常に驚かれ、『直ちにここへ通すように』と仰せになられたのでございます。

頭を丸め、物乞いのような身装で参上した大臣を見るや、王はその理由を訊ねられました。『王が御国をお離れになりたいと仰せになられましたことがよく分りました。それ故、私もそうしたいからでございます。神は私が王から授かりました数々の御恩をすっかり忘れてしまうことなど決っしてお望みではございませぬ。今日まで王の権勢と栄耀に大きく与って参りました私であります。これから王が背負い込もうとなさっておられます労苦と流浪の旅にも私が与るのは当然の理でございます。その上、王は王妃様や王子様、それに王領と王領内の総ての物をいさぎよくお見捨てになられるのでございますから、私が自分の物を捨てるのに悔む理由などはございません。私は王と御一緒致します。そして、そっと密にお仕え申し上げます。それに、私達の行末にとりましては十二分の金貨をこの着物に縫い込んで持参致しております。さあ、出立の時刻でございますれば、気付かれませぬ内に旅立つことに致しましょう』と申し上げた。

王は話をすっかりお聴きになると、それが大臣の真心からの言葉であることを悟られとても感謝されました。そして、これまで申したことは総てが偽であり、大臣の忠義を試すためのものであったことを打ち明けられたのでございます。このように自らの野心にすっかり心を奪われてしまっておりました大臣は、邸にいる囚われの身の賢者の助言という神の御加護を受けて守護されたのでございます。

ルカノール伯爵様、友とお考えのお方にお欺かれになりませ

ぬよう、御身をお守り下さることが肝要でございます。あのお方が殿に申されましたことは、ただ殿の御本心を試されんがためのことであることは間違いございません。こういう訳でございますから、そのお方とお話しなされます時は、殿の御関心は御自身の御領地と御面目のことだけに向けられており、あの方の物などには全く欲心のないことを、人がこの二つのことを友のために守れないのであれば両者の間の友情は長続きしないことを、お理解りいただけるような方法でお話しなされますことが大切でございます。」

伯爵は助言者パトローニオが素晴しい助言を与えてくれたことがお分りになると、彼の言葉通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンは、この教訓談が有益であると考えたので、本書に記させた。さらに、この教訓談の真意を表わす次の二つの詩を作った。一つはこのようであった。

騙されるな、信じるな、ただでは
誰も、他人の為に進んで損はしやしない。

そして、もう一つは次のようであった。

神の恩恵と人の良き助言により
人は危難を免れ、大願を成就する。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……[11]

第二話　「ある実直な男とその息子に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオと話をしておられることがあったが、それは次のような話であった。

「やりたいことがあるのだが、どうしたものかと思案投首の有様だ。やれば非難されることは火を見るよりも明らかだが、と言って手を拱いていると、何のかのと理屈を言い立てて非難されることも分り切っておる」と打ち明けられ、「この件について予が取るべき態度を助言してくれ」と伯爵はパトローニオにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「殿には私よりも適切な助言をお与えになられますお方が大勢おいでになり、その上殿が立派な英知を神からお授かりになられておられますことを熟知致しておりますれば、私の助言など不要かと存知ます。しかしながら殿の御所望とあらば、私の愚見を申し上げさせていただくことに致します。ルカノール伯爵様、ある実直な男とその息子に、ある時持ち上がりました事の話にお耳をお傾けいただきますればこの上なき幸でございます。」

伯爵は、それがどのような話であるのか聴かせてくれるよう

にお頼みになられた。そこで、パトローニオは語り出した。

「殿、ある実直な男にはひとりの息子がございました。年齢が示しますように、息子は若輩ではありましたが、なかなかの利口者でございました。父親が何かをやろうと致しますとその度毎に、『事が都合よく運ぶのは珍らしいのだから、父さんがやりたいと思っている事もうまく行かなくなるのが今に分るよ』と言っておりました。こういう訳でございますから、父親は長年の間やりたい事がなかなか出来なかったのでございます。若者は利口であればあるほど、いとも容易く自らの企に大きな誤をもたらすものであります。彼らは、事を始めるに当っての判断は持ち合わせているのでございますが、遣り遂げる手だてを知らないからでございます。とどのつまり指導者を持たない若者は大きな誤をしでかすものであることを、殿にはよくよく御心得おきいただきたいものでございます。さて、この若者もなかなかの利口者なのですが、何事においても経験が無いものですから、父親の大事な仕事に絶えず余計な口を差し挟んでおりました。父親は自分のやりたい事を絶えず妨げ常に口やかましく異を唱え続ける息子への不満や腹立を堪えながら長い間過して参りましたが、ついに、息子への戒と息子の将来に持ち上る様々な出来事に対処する方法の手本となるように、これからお聴きいただきますような手を打ったのでございます。

実直な男とその息子は農夫で、二人の住居はある邑の近くにございました。ある時、市が開かれる日に、その実直な男は息子に、必要な品物を買いたいので市へ行こうと持ち掛けたのでございます。二人は品物を持ち帰るのにロバを連れて行くことに決めました。ロバを連れてはおりましたが、親子は共に徒歩で行っておりました。途中、目指す邑の方からやって来る二・三人の男達に出会い、互いに挨拶を交して別れました時、男達が『あの親子はどう見ても賢そうには見えないぜ。ロバの背は空なのに二人共歩いていやがるんだから』と言ったのでございます。これを聞くと実直な男は息子に、『あの連中が言っていることをお前はどう思うのだ』と訊ねたのでございます。すると息子は、『あの人達は正しいことを言っている』と返答し、さらに『ロバには何も載せていないのに二人が歩いているのは間が抜けているよ』と言い添えたのでございます。そこで実直な男は息子に『ロバに乗れ』と命じました。

このようにして街道を進んでおりますと、また数人の男達と出会しました。すると別れ際に彼らは、『あの実直な男はひでえ間違をやらかしている』と言い始め、『年かさで疲れてるのが歩いて、元気のいい若いのがロバに乗って行ってらあ』と続けました。

そこで実直な男は息子に、『あの連中が言っていることをお前はどう思うのだ』と訊ねました。すると息子は、『あの人達は正しいことを言っている』と、また返答致しました。そこで、父親は『ロバから降りろ』と息子に命じ、代って自分が乗ったのでございます。

しばらくすると再び数人の男達に出会い、彼らも『辛いことにはまだ耐えられない若いのを歩かせ、忍耐力のある大人がロバに乗って行くなどは理屈に合わない』と言ったのでございます。そこで実直な男は息子に、『あの連中の言っていることをお前はどう思うのだ』と訊ねました。すると若者は、『おいらもその通りだと思うから、あの人達は正しいことを言っている』と又また返答致しました。二人が揃って歩くことはないものですから、実直な男は『ロバに乗れ』と、息子に言ったのでございます。

このようにして更に進んで行きますと、また数人の男達に出会すことになり、すると彼らも『二人が乗っているロバの痩せようといったら、満足に歩き続けるなんて出来やしないぜ。なのに乗って行くんだから、とんだ罪作なことをしやがる』と口々に言い始めました。そこで実直な男は息子に、『あの人の好い連中が言っていることをお前はどう思うのだ』と訊ねました。すると若者は父親に、『確にその通りだ』と返答したのでございます。そこで父親は、息子に次のように言い返しました。

『息子よ、よく聞け。わし達が家を出た時は共に徒歩であったが、さりとて連れているロバの背には何も載せていなかった。その方がよいとお前が言ったからだ。しばらく行くと、二人が歩いているのは愚かなことだと言う連中に出会った。そこでお前にはロバの背に乗れと言ったが、わしはそのまま歩き続けることにした。お前は彼らの言っていることは正しいと返答したからだ。ところがその後で、老人を歩かせているのは間違いだと言う連中に出会った。そこで、お前が降りて、わしがロバに乗って行った。お前もその方がよいと応じたからだ。するとまた、忍耐力のない若いのを歩かせているのは道理に外れていると言われたので、わしと一緒にロバに乗れとお前に命じた。お前は、おいらが歩いて父さんがロバに乗って行くよりもこの方がよいと言ったからだ。ところが、今出会った連中は、わし達がロバに乗っているのは大きな過であると言っておる。するとまたもやお前は、彼らが真実を言っていると思っておる。こういう次第なので、わし達が他人から非難されずにやれるのはどのやり方なのか、頼むからわしに教えてくれ。わし達はすでに二人揃って徒歩で行くのは愚かなことだと言われた。また、わしが歩きお前がロバに乗って行くのも間違っていると非難された。そこで、わしがロバに乗り　お前が徒歩で行くと、これもまた誤であると咎められた。そして今、わし達がロバに乗っていると、酷いことをしていると誹られている。何れにせよわし達はこの内のどれかをやらねばならないのだ。すでにわし達はそのどれをも試みたのだが、何れも間違っていると非難されている。ところで、わしがこのようなことをしたのは、将来お前の企に持ち上がる様々な出来事に対して、お前がこれを手本とするためにだ。よいか、人が良しと言うことは決っしてするまい、と肝に銘じておくことだ。たとえそれが良いことであっ

ても、悪意を抱く奴らやその恩恵に与れない連中は、それを貶すであろう。逆に、もしそれが良くないことであれば、善を愛する行い正しい連中が、お前の悪行を善であると言うはずがないからだ。だから、お前の身にとって最も都合のよいことをやりたいのであれば、よいか、その時一番適切であると考えることを、それが悪いことでさえなければやることだ。他人の言葉を気遣って止めてはだめだ。他人は何時でもいろんな事に思いつくがままに口を利くものであるが、それは彼らにとって、どれが本当に役に立つのか分らないからだ。」

「ルカノール伯爵様、殿は私に、『やりたいのだが非難を受けるであろうし、かと言って、拱手でいても同じ結果は免れぬので懸念しておる』とのお言葉に、『助言せよ』と仰せになられました。これが私の助言でございます。殿には、事をお始めになられます前に、それから生じます利害をよくお考えいただきたいものでございます。そして、御自身のお考えを過信なさらず、欲には目が眩まぬようにご用心なさって下さい。その上で、賢明で、誠実で、口堅い人物である、とご確信なされますお方の助言をお受けになられることでございます。しかしながら、そのような助言者をお見つけになられなくて、しかも事が急を要する場合でありましても、せめて丸一日を経るまでは、急いで事をお始めなされませぬように御留意なさって下さい。殿も御自身のお役に立つことをなさりたい時は、これらの忠告をよく御心にお留めいただきまして、他人の言辞を懸念するあまりに決してその御実行をお止めなさいませぬように、くれぐれもご忠告申し上げます。」

伯爵はパトローニオから受けられた助言が正鵠を射たものであると判断されたので、そこで、その通りに実行されたところ結果は上々であった。

ドン・ファンは、この教訓談を聴き終えた時、本書にそれを記すように命じた。さらに、この教訓談の真意を簡明に述べる詩を作った。それは次のようであった。

人には勝手に言わせておけ、
己の判断が悪くなければ、
役に立つことを選びとり、
他のことは考えるな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第三話　「イングランドのリチャード王が回教徒と戦うために海に跳び込んだ事について」

ある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオと部屋に引き込もられ、彼に次のような話をされた。

「パトローニオ、予はお前の叡智を心から信頼しておる。お前の理解や助言の出来ぬことを、代ってやれる者など誰ひとりおらぬことは言うまでもないことだ。そこでお前に頼むのだが、これから話すことに最もふさわしい助言を予に与えてくれ。

見ての通り、予はもはや若くはない。その上、予のこれまでの人生は、生まれてからこの方まで常に戦の明け暮れであり、その中で予は成人し、今日まで生き長らえてきた。ある時はキリスト教徒と、またある時は回教徒との戦であった。さもなくば絶えずその時々の予が臣従する王や、周囲の諸侯達との争であった。予が原因で争が持ち上がることのなきよう常に心してはいたが、キリスト教徒と戦を始めると、罪の無い大勢の人々に甚大な被害を与えることは止むを得なかった。このことからも、これまでにわれらが主なる神の意に反して犯せし様々な過誤からも、この世の何人に、また何物に縋ろうと、一日たりとも死を免れ得ぬことは承知しておる。その上、この年齢からも長寿の叶わぬことは確である。言辞を弄したからとて、他の手だてを講じたからとて、許されるものではない。これまでの行いの善悪により、予を裁かれる審判官たる神の御前にまかりこさねばならぬことも承知しておる。不運にも、真正なる神が予の願の成就が叶わぬ理由をお見つけになれば、永遠に留らねばならぬ地獄の苦患の下へ落行くことから免れ得ぬのは当然至極だ。この世での事が予に利をもたらさなかったのであるから。だが、もし神が予に功徳のあることをお見つけになり、慈悲の御心をお示し下さるのであれば、神の下僕の仲間となり、神の国へ行けるように予をお選び下さらねばなるまい。そうなれば、この至福、この歓喜、この光栄を世の如何なる喜悦とも比較べ得ぬことは言うも愚かなことだ。天国か或は地獄か、それは行いによって得られるものであるから、予が神の意に反して犯した様々な過誤の償が出来併せて慈悲の御心が得られると、お前が考える予の身分にふさわしい最良の手だてを助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「このようなお言葉、身に余る幸でございます。なかんずく、御身分にふさわしい助言をお求めになられましたことが嬉しうございます。そのお言葉がなければ、過日お話し致しました物語の中で王が大臣を試みた如く、私をお試しなさるために仰せになられたのだと速断したでありましょう。しかし、何よりも嬉しゅうございましたことは、殿が御身分と御面目を保ちつつ、神の意に反して犯された様々な過誤の償をなさりたいと仰せになられたことでございます。ルカノール伯爵様、御身分をお捨てになり、真実、受戒なさるか、或は隠者になりたいとのお考でおられますならば、必ずや殿には次の二つの事が持ち上がるでありましょう。一つは、殿が世間の非難の失面にお立ちになることでございます。と申しますのは、殿の御行為は気力の衰えによるものであるとか、善き人々に囲まれて暮らすのが疎ましくなったからだ、と評されるからであります。二つは、修道院の厳

しい戒律には殿の御堅忍も及ばなくなることであります。そうなりますと還俗は時間の問題となるでありましょう。またそのまま修道院での生活をお続けになられましても、当然の戒律をお守りにならないのであれば、殿の魂にとりましてこの上もなく不為となり、魂のみならず肉体や御面目にとりましても大変な恥辱や侮辱となりましょう。しかしながらこれらを御勘案なされましてもなお修道院へ入ることが善い行いであるとお考えでおられますならば、神が高徳の隠者に、彼とイングランドのリチャード王に生じるのを啓示なされました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

ルカノール伯爵は、それがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは語り出した。「日々精進に励むひとりの隠者がございました。神の恩恵を得んものと、功徳を積み修業に耐えておりましたところ、神は慈悲の御心をお示しなされ、『汝は天国の栄光を得るであろう』と、隠者に確約されたのでございます。隠者は神の御言葉に心から感謝し、被昇天が確実なものとなりましたことから、『天国で伴(つれ)となるべきお方をお教え下さい』と懇願したのでございます。神は天使を遣わされ、『そのようなことを尋ねるものではない』と幾度もお諭しになられましたが、隠者が繰り返し熱心に懇願致しましたところ、われらが主なる神は、願を叶えてやろうとお考えになられたのでございます。そこで再び天使を遣わされて、『イングランドのリチャード王と汝は天国で互いに伴となるであろう』と、お告げになられたのでございます。

この御言葉を聞くや隠者はひどく落胆致しました。実は王のことはあまりにも知り過ぎていたからでございます。戦好きな王は、大勢の人を殺害し、財産の強奪や略奪を欲しいままにしておりましたので、自分とはまるで反対の救いの道からは遠く懸け離れていると覚しき生活を送っていることも承知していたからでございます。こういう訳で、隠者はとても不快な気分になったのでございます。

われらが主なる神は隠者の容子を御覧になると天使を遣わされて、『申したことに驚き、不満を洩らしてはならぬ。リチャード王が跳び込んだ行為は、隠者が生涯かけて積み上げてきた功徳にも優り、恩寵を受けるに価する務を神に対して行ったことは間違いのないところである』と、お告げになられたのでございます。

隠者は増ます驚き、『どうしてそのようなことがあり得るのですか』と天使に訊ねました。

そこで天使は、『フランス王、イングランド王、それにナバーラ王が海路聖地を目指して赴かれた時の話(こと)である』と語り出されました。『港を間近かに全員上陸の準備を終えた時、岸壁には下船が危ぶまれるほどのモーロ勢の大軍が陣取っているのが目に入った。そこで、フランス王は、イングランド王の所へ、〃対処すべき手段を協議したく本艦にお出乞う〃との伝令

を送られたのだ。ところが、すでに馬上の人であったイングランド王は伝言を聞くやフランス王の使者に次のように返答された。―これまで予は数限りなく神の憤怒を招き、神を侮辱する行為をして参った。故に、予は常々現身の犯せし罪の償いの叶う機会をお与え下さいますよう慈悲の御心を示し給へ、と神に切願して参った。有難きかな、今、念願の時が参ったのだ。よしんば敵地で果つるとも、この世を離れる前に、罪の償いを果たし心から侮い改めたれば、必ずや神は予の魂に憐みを懸けられんものと信じて止まぬ。また、モーロ人を打ち破ることが出来るならば、神への大きな務を果すことになり、モーロ人は皆幸福になるであろうことも間違いない。―

言い終えるや王は、我身と魂を神に託されて御加護を願われると、十字を切り、〃予に続け〃と臣下に命じられ、すぐさま馬に拍車を掛けられると、モーロ勢が待ち受ける岸壁を目指して海に跳び込まれた。港は指呼の間にあったとはいえ、水はまだ深く、たちまち人馬は水中に没しその姿形は見えなくなった。しかし、この上もなく御情深い全能の主なる神は、福音書にお述べになる〃罪人の死を望むのではなく、罪人が改心し、生きることを望むのである[12]〃との御文言を憶い出され、イングランド王に救いの手を差し伸べられた。すなわち、王をこの世の死から解き放たれ永遠の生命をお与えになるために、水難から解き放たれたのだ。かくして王はモーロ勢の大軍に向って突き進んだ。

イングランド勢は主君の行動を見てとるや、後に続いてことごとく海に跳び込むと、モーロ勢に向って行った。フランス勢はこれを見て、後れをとるは無上の恥とばかりに、これまた全員モーロ勢目指して海に跳び込んだ。モーロの軍勢は、死をも恐れず勇猛果敢に自陣を目指して攻め寄せて来るキリスト教徒軍を目にすると、迎撃もやらずに港を放棄し、さっさと逃走し始めた。キリスト教徒軍は港に上陸するや直ちに追撃をかけ、多数のモーロ人を殺害し勝利を博したのだ。かくしてキリスト教徒軍は神への務に大いに励んだのであった。それにしてもこの大勝利はイングランドのリチャード王が行ったあのひと跳びがもたらしたものである。』

このような話を拝聴した隠者は心から感激するとともに、かくも立派に神にお仕えになり、かくも高くキリスト教を称揚なされたお方と天国で伴となれる格別の恩寵を給わることを悟ったのでございます。

ルカノール伯爵様、神にお仕えし、神になされた幾多の侮辱の償いをおやりになりたいお考えでございますならば、この世を旅立たれる前に、危害をお与えになられた人々に償いをなされますとともに、御自身の罪の贖いをもなさって下さい。決して現し世の徒で益なき幻の栄誉に思いを至されませぬように。ましてや権力に意を注ぐように勧める人々の言葉を傾聴なされてはいけませぬ。彼らは大勢の家臣を維持したいがために殿に勧めているのでありまして、実際にそのようなことが出来るの

かどうか、権力と称するものだけを重視した者の何人が生き長らえたのか、その者達がどのような末路を辿ったのか、彼らの所領には今誰が住んでいるのか、といったことに留意したり考慮することがないからでございます。ルカノール伯爵様、殿は出家と、神になした幾多の侮辱への贖罪の遂行とを願望していると仰せでございますれば、どうか徒で虚しい幻の栄誉への道を辿ろうとなさいませぬよう御心置き下さい。しかしながら、海や陸の何れにおかれましてもモーロ軍と戦うことで神にお仕えすることがお出来になられますように神から所領をお授かりになっておられるのでございますから、どうか御領地に放置なさいますものが万全となりますようにお努め下さい。その後で心から贖罪をなされ、功徳を施されることでございます。そして恩寵を賜るよう過誤の償いを神になされました暁には、総てを他の者にお任せなされることがお出来になり、生涯を神への御奉仕に御専念なされることが可能となるのでございます。これが殿の御身分と御面目を保ちつつ、魂を救済するために取り得る最良の方法と考えます。

このように神にお仕えなさいますれば、殿のお生命は永遠のものとなりますが、御領地に御留まりになられるのであれば、もはやこれ以上長らえることは出来ないとお考えいただかねばなりますまい。よしんば神への御奉仕の最中に殿のお生命が果てましょうとも、申し上げましたようにお過しなさいますれば、殿は殉教者となられ至福を得られるでありましょう。たとえ討死なされなくとも、立派な御意志と善行が殿を殉教者に祀るでありましょう。さすれば、殿を誹謗する輩も口を閉ざし、殿が騎士としての務を放棄なされたのではなく、現し世のはかなき幻の栄誉や魔神の騎士におなりになられたのでもなく、神の騎士になろうとお努であることを悟るでありましょう。

伯爵様、御所望に従いまして、殿の御身分に最もふさわしいと考えまする魂を救済する方法を申し上げました。どうかイングランドのリチャード王がなされましたた、実に見上げた御行為にお倣い下さい。」

ルカノール伯爵はパトローニオから受けられた助言にとても満足された。そして伯爵御自身の願でもある、パトローニオの進言が現実のものとなるように神に乞われた。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので、本書に記すことを命じた。そしてこの教訓談を要約する詩を作った。それは次のようであった。

騎士と自認する者は、
このひと跳びを乞うべきである。
受戒して、
高き壁の背後に閉じ籠るな。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第四話　「あるジェノバ人が臨終の間際に自らの魂に言った事について」

ある時、ルカノール伯爵は助言者パトローニオとの話の中で、次のようなことを語られた。

「パトローニオ、有難いことに予の所領はすこぶる良好で平穏な状態にある。その上、予は周囲の諸侯にも優るとも劣らぬほどのものを所有しておる。最近、多分に危険を孕む企に手を付けるよう予に勧める者がいて、予もその気になりかけているのだが、信頼を寄せるお前の考えも聞かずに始めたくはなかった。そこで、お前に予の取るべき態度を助言してくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」と、パトローニオは返答した。「殿を利するかの如きこの企を御実行に移されます前に、あるジェノバ人に起きましたことをお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようお頼みになられた。

そこでパトローニオは語り出した。

「ルカノール伯爵様、朋輩の中にあってもひと際富と幸運に恵まれておりましたひとりのジェノバ人がございました。ところが明日をも知れぬ重い病に罹り、死を覚悟致しましたので、親類縁者友人一同と妻子を枕頭に呼び寄せると、海と陸が一望に見渡せる豪華な大広間に身を置き、目の前に金銀宝石はもとより全財産を持って来させました。そしてそれらを前にして自らの魂に戯れた口調で話し掛けたのでございます。

『魂よ、お前はわしの肉体から離れようとしているが、このわしにはその理由がまるで分らないのだ。お前が妻と息子達を求めておるのなら、ここに、お前の目の前に満足のいくのがいるではないか。また親類の者や友人達を求めておるのなら、ここに、信心深くて誠実なのが大勢いる。ところがお前の求めるものがわしの全財産であるのなら、それもこの通り、これ以上は不要と思えるほど沢山ここにある。多くの富や名声をもたらす大小の商船がお前の求めるものであるのなら、ほら、この大広間から眺めやるあの海に幾艘も浮んでおる。そしてまた、快美この上なき庭園のある屋敷を求めておるのなら、この窓から見渡せるのがそうだ。それに馬や鳥、狩猟や愛玩用の犬、お前の心を楽しませる道化役者達、沢山の寝室や説経座、必需品を総て完備した豪華な館を求めておるのなら、お前には何ひとつ欠けているものは無いではないか。これほどの富を所有しておりながらそれを享受して楽しまず、まだ未知なるものを探し求めたいのであれば、さっさと行ってしまうがよい。お前が不幸に見舞われようと心を痛める者などいるものか。』

ルカノール伯爵様、殿は御加護の下で富と名声を手につつがない状態におられますならば、わざわざ危険を冒されてまで人

が勧める事をお始めなされますのは、御懸念の元と考えます。話を持ち掛けておられますお方も、今は、殿の御要望に添うように行うと言ってはおりますが、心中では、殿がひと度その企に御参加なされますと、自分達の思い通りに操り、やがて殿が窮地に陥られれば、後は意のままに従って来る、との胸算用から盛んに勧めているのでございます。恐らくは殿の弱体化を利して領地を増やそうという算段でございましょうから、殿が泰然たる態度でおられます限り、あの方々は手が出せないのでございます。さもなくば、ジェノバ人が自らの魂に申した事が殿に生じることでありましょう。どうか平穏無事にお過しなされまして、何もかもを危険に曝すようなことには決して御身をお入れなされませぬように。これが私の助言でございます。」

伯爵はパトローニオの助言にとても満足され、その通りに実行されたので結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたがこの度は作詩をせず、カスティーリャで媼達がよく口にする次のような俚諺を記した。

ゆったりと座している者は立ち上がらない。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第五話　「嘴にチーズの欠片をくわえていた鴉と狐に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵が助言者パトローニオと話をしておられた時、次のようなことを語られた。

「パトローニオ、予の友であると吹聴するお方が盛んに、やれ人望が、やれ大した力量が、やれ徳がおありだと申して、さも予が様々な美徳を身体中に具えているかの如く誉めそやし持ち上げておる。ところがこれまでに一度も面識がないのにも拘らず初対面の際に、非常に有利だと思える取引を申し出た。」

そこで伯爵は持ち込まれた取引の内容をパトローニオに語られた。その取引は一見有利なように見えはしたが、パトローニオは美辞麗句を連ねた言葉の下に詐が潜んでいることに気が付き、それを伯爵に申し上げた。

「ルカノール伯爵様、そのお方が、殿の御力や御身分をみだりに実際よりも優れているかのように主張なされますのは、殿を欺かんがためであることを御承知おき下さい。そのお方が仕掛けられようとなさっている罠から御身をお守りなされますには、鴉と狐に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ある時鴉がチーズの大きな欠片を見つけましたので、邪魔をされずに心ゆくまでゆっくり賞味しようと木の上に飛び上がりました。ところが、木の上に止まるとその下を狐が通りかかり、鴉がくわえているチーズを目に留めるや奪い取る算段をあれこれ思案した挙句、次のように鴉に声を掛け始めたのでございます。

『鴉殿、御貴殿は気品に溢れる凛凛しい御容姿のお方である、とのお噂を耳に致して以来随分久しくなります。その間もあちらこちらとお探し致しましたが、我身の不運のせいか、或は神の御意志のせいとでも申しましょうか、今日までお見掛けすることが叶いませんでした。今お目に懸りまして、御貴殿が世評も及ばぬ多くの美徳を具えておられますことがよく分りました。お世辞の上でこのようなことを申し上げているのではないことをお分りいただくために、私が御貴殿から御見受け致します数々の美徳を、〝さほど品のある奴ではない〟などといった世間の輩の受け留めております印象等と織り交ぜながら申し上げることに致します。世間は、黒い色の物は他の色の物ほど気品があるとは思っておりませんので、御貴殿が、羽はもとより目、嘴、脚、爪に至る全体がお黒い色であられることから見悪(みにく)いと考えております。彼らは自分達が間違っていることに気が付いてはおらないのです。御貴殿の羽は黒く、それも漆黒であることは紛れもない事実ではありますが、それはこの世で一番美しい鳥、孔雀の羽のように艶やかな藍色にも見紛う濡場色と申せし色なのです。そのお黒い御貴殿の目。目の役目は何と申しましても視ることに尽きるのですから、黒い色の物は何れも良く見え、その上安らぎを与えてくれますことから、目には黒色が一番ふさわしくそれに美しいのです。だからこそ、羚羊の目は動物界で一番黒い色をしているところから非常に誉めそやされるのです。御貴殿の嘴や脚や爪の力強いこと。同じ体軀の鳥の中にあって御貴殿に抜きん出る鳥などはいますまい。それにもまして、御貴殿のあの何と軽やかな飛翔振り。強い向風も何のその、他の鳥の真似の出来ないところです。ですから、万物を十分な理由をもって十全にお創りなされます神は、全ゆる点で非の打ち所のない御貴殿が、何れの鳥よりも巧みにお歌いになる才をお授りになっておられないとはお認めにはなりますまい。神の慈悲の御心の現われにより、私は御貴殿とお目に懸ることが叶い、世評に優るる数々の美徳を兼備しておられることが分りました。もしや一曲お聞かせいただけますなら生涯忘れ得ぬ身に余る喜悦でございます。』

ところで、ルカノール伯爵様、狐の狙いは鴉を欺くことではございましたが、申していることは常に真実であったことを御心にお留めいただきたいのでございます。悪どい欺瞞や侮辱は常にまやかしの真実の衣を着て現われることは間違いございません。

鴉は、狐が手を替え品を替えては誉めそやす言葉が真実であることを知ると、その他のことでも真実を述べていると思い込

み、狐を友人と思いこそすれ、嘴にくわえているチーズを奪うために言っているなどとは露程にも疑ってはおりませんでした。ですから、歌わそうと盛んに浴びせる讃辞や切なる願いについその気になり、嘴を開けた途端、チーズはポトリと地に落ち、狐はそれを拾い上げるとさっさと立ち去ったのでございます。鴉は、気品があるとか多くの美徳を兼備しているといった世辞に乗せられ、狐の言葉をすっかり信用したがために、見事に欺かれたのでございます。

ルカノール伯爵様、殿は神からあらゆる事に過分の恩恵を賜っておられるのでございますから、御自身が思ってもおられないほどの力量や人望、それに多くの美徳を兼備なされているなどと殊更に言い立てるお方のお言葉は、殿を欺かんがためのものであることをお分りいただきまして、くれぐれも御用心の上分別ある者としての御振舞いをなさって下さい。」

伯爵はパトローニオから受けられた助言にとても満足され、その通りに実行されたので間違いをされることはなかった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので、本書に記させた。そして、この教訓談の真意を簡明に要約する詩を作った。それは次のようであった。

汝の身に具っていないもので誉めそやす者は、
汝の所有する物を奪わんがためであることを知れ。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第六話　「農夫が亜麻の種を播いた時、燕と他の鳥達に起った事について」

ある時、ルカノール伯爵が助言者パトローニオと話をしておられることがあったが、次のようなことを語られた。

「パトローニオ、予に優る武力を有す隣邦の諸侯達が、予を欺いて攻撃せんものと同盟を結び何やら謀を練っているとの噂を耳にする。予はそのような噂を信じておらぬから懸念などしてはおらぬが、お前は、予が前以って何らかの策を講じておくべきであると考えるのなら、お前の叡智を頼み、予に助言してくれることを願う。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「この件に関しまして、殿のお役に立つと考えますことをおやりいただきますには、燕と他の鳥達に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

ルカノール伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは語り出した。「農夫が亜麻の種を播いているところを見た燕は、持前の賢しさで、亜麻が成長すれば人間が鳥を捕獲する罠網を作れることを見抜

きました。そこで、直ちに鳥達の所へ行くと皆を呼び集め『人間が亜麻の種を播いている。大きくなれば皆きっと大変な目に会うことになるから、今のうちに亜麻畠へ行って種をついばんでしまおう』と持ち掛けました。禍事は初めのうちに処置するのは容易のですが、手遅れになると至難のことになるからでございます。ところが鳥達は燕の忠告を無視して一向に従おうとはしないものですから、再三再四繰り返しましたが、いくら忠告をしても他の鳥達は気に掛けるどころか全く考えもやらないことを悟らされたのでございます。その間にも亜麻はどんどん大きくなり、もはや鳥達がいくら脚や嘴を使っても引き抜くことが出来ないほどに成長していました。ですから、鳥達が気付いた頃には、もはや目の前の禍を防ぐ手だてを施すことが出来ぬほど亜麻はすっかり大きくなってしまっていたのでございます。いまさらながら燕の忠告を聞き入れなかったことを悔やみましたが、時すでに遅く、後悔先に立たずという状態でございました。

燕は、このような事態になる前に、つまり鳥達が迫り来る禍にまったく注意を払おうとしないのを悟った時、さっさと人間の所へ行くとその庇護の下に身を委ね、わが身と一族の安全を手に入れたのでございます。それからというものは、燕は人間の庇護の下で安心して暮らすことが出来るようになりました。

一方、身を守ろうとしなかった他の鳥達は、日々、罠網で捕えられているのでございます。

ルカノール伯爵様、迫り来る禍から身の安全を願われるのでございますならば、〝禍は懈惰に生ず〟を御心得いただきますように。と申しますのは、思慮ある人とは、蟻の一穴から先の禍を予見してそれを防ぐために忠告を与える人のことであり、千丈の堤が破れてから悟る人のことではございませんから。」

伯爵はこの助言にとても満足され、パトローニオの言葉通りに実行されたので結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので、本書に記させた。そして次のような詩を作った。

禍が身に降りかかる前に
その根を断っておくべきである。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第七話　「ドニャ・トゥルアーナという名の女に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵はパトローニオと次のような話をしておられた。

「パトローニオ、あるお方が予に一つの企を持ち掛けられ、その上にそのやり方までも教示なされた。その企には莫大な利

益が見込まれており、そのお方の思惑通りに事がうまく行くのであれば、予の利益も大きなものになることは間違いない。利というものは、次から次へと利が利を産み出しては増えて行き、それが積り積って最後には莫大なものとなるからだ。」

そこで伯爵はパトローニオにそのやり方を説明された。パトローニオはその企の中味が分ると伯爵に次のように返答した。

「ルカノール伯爵様、私は常々、根拠のない当ではなく確なことを信奉する人は賢明である、という言葉を耳に致しております。と申しますのは根拠のない当を頼みとする人には、ドニヤ・トゥルアーナに起きました事が生じるからでございます。」

そこで伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるように頼まれた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「名をドニャ・トゥルアーナと申す、どちらかと言えば貧しいひとりの女がございました。ある日、蜂蜜の入った壺を頭に載せて市場へと出かけたのでございますが、その道すがら、このようなことに思いを回らし始めたのでございます。『壺の中の蜂蜜が売れたら卵を沢山買おう。やがて卵が孵って雌鶏が生れれば、それを売って稼いだお金で羊を数頭買えるわ。こんな風にして稼ぎ出した儲で買い続けたらやがて近所中で一番の金持になれるわ。そうなればどっさり儲けたお金で息子や娘達に嫁や婿を貰ってやるんだ。そして、皆を伴れて街を歩くと、あれほど貧しかった女がこんな大金持になるなんて、何と運の良い女なんだろう、と皆口々に羨ましがるわ』とまあこのような空想に耽っている最中に、幸運に恵まれた感激のあまりに声を立てて笑い出し、ついでに額をポンと手でぶったのでございます。その途端、蜂蜜の入った壺は地面に落ちて破れてしまいました。破れた壺を見て、そうならなければ手に入れることが出来たはずの一切合財を失ってしまったかのように、彼女は悲嘆にくれ始めたのでございます。つまり、あまりにも空想に耽った為に結局彼女は元も子も無くしてしまったからでございます。

伯爵様、人が勧める事であれ、御自身がお考えの事であれ、それが結実することを願われるのでございますならば、常に確なことだけを信奉なされて、決して不確で根拠のない当を頼りとなされてはいけませぬ。たとえおやりになる場合でも、皮算用の為に全財産をお賭けになり、元も子も失ってしまうことのなきように御留意なさって下さい。」

伯爵はパトローニオから受けられた助言にとても満足され、その通りに実行されたので結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談に満足したので本書に記させ、次のような詩を作った。

確なことを頼りとし、
根拠のない当は捨て置け。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第八話　「肝臓を洗浄しなければならないと告げられた男に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵が助言者パトローニオと話をしておられた時、次のようなことを語られた。

「パトローニオ、実は、神から様々なことでこの上なき恩恵を賜って参ったにも拘らず、今、予は手もと不如意に陥っておる有様だ。この困窮から何としてでも抜け出すには、死ぬほどの辛きことなのだが、予が最も愛着を抱いておる所領の一部を売り渡すか、これと同じ損害を招かざるを得ぬ他の手段を講じねばならぬことは必定だ。予が自分の骨身を削ってまでも荒療治を断行しようとしている時に、大勢の者がやって来ては、差し当ってさほど入用としてはおらぬのに、身を削るようにして入手した金子を、融通してほしいと頼むのだ。そこで神から授与されたお前のすばらしい叡智を頼みに、この件に関して予が取るべき態度を助言してほしい。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「その方々のことで殿に生じております事は、重い病を煩う男に起きました事に類似致しております。」

そこで伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ある男が重い病に罹りました。それは、病人の腹部を切り開き、これまでさんざん酷使されてきました肝臓を取り出して薬で洗浄し、汚物を取り除く以外には病人を治すことは不可能だ、と医師達が見立たほどでございました。さて、病人がこの開腹術の苦痛に必死に耐え、医師が病人の肝臓を手に取り上げた時でございます。病人の傍らにいた者が、自分の猫のために肝臓をひと切れいただけますまいか、と懇願し始めたのでございます。

ルカノール伯爵様、差し当ってさほど御入用となされていない方々に御融通なさろうと、御自身の骨身を削ってまでも金子の入手にお努めなされますのであれば、どうぞ御随意になさって下さい。その前に申し上げておきますが、決して私の助言をお受けになられておやりなさいませぬように。」

伯爵はパトローニオが語った話に満足され、その後はきっぱりとそのような申し出を退けられたので結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので、本書に記すことを命じた。そして次のような詩を作った。

与えねばならぬ物の見分がつかぬと、
甚大なる損害が己が身に及ぶことになる。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第九話　「二頭の馬とライオンに起った事について」

ある時、ルカノール伯爵が助言者パトローニオと次のような話をしておられた。

「パトローニオ、予には長年矛を交えてきた不倶戴天の宿敵がある。ところがこの度、われらよりもはるかに強力な敵が戦を仕掛けんものと、虚視眈々と狙っておることから、われらは蒙る被害の大きさに戦々恐々の有様だ。このような時、予の宿敵が、われらに戦の緒を投げ掛けようとしている強敵の攻撃から身を守るために、同盟を結ぼうではないかと申し出た。われらが手を結べば防御出来ることは間違いないが、これまでと同じ状態を取り続けるならば、敵は当然各個撃破を試みるは火を見るよりも明らかだ。その方が容易く打ち破れる上に、片方を打ち取れば残る片方も難なく撃破することが可能だからだ。ところが予は、今、態度を決めかねてほとほと思案に尽きておる。平和協定を結べば互いに信頼を寄せ合わざるを得ぬが故に、一度彼の手中に身を委ねれば予の生命の保証はおぼつかぬのでは、つまり宿敵が予を謀る算段ではないのかと恐れる気持があり、それが予の不安の原因となっておる。これにも増して危惧することは、宿敵の申し出通りにわれらが互に友交の絆を結ばぬ時は、先に申したように大打撃を蒙ることが自明の理であるからだ。信頼して止まぬお前のすばらしい叡智を頼み、この件に関して助言を与えてくれるように願む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「この問題はとても危険な要素を孕んでおりますが、考えますところ、殿にとりまして最も賢明な身の処し方は、チュニスでドン・エンリケ親王と起居を共に致しております二人の騎士に起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます。」

伯爵はそれがどのような話なのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「伯爵様」とパトローニオは語り出した。「ドン・エンリケ親王と起居を共に致しております二人の騎士がございました。両名は無二の親友でありましたから、常に同じ宿舎で寝食を共に致しておりました。二人の騎士は馬をお持ちでございましたが、この二頭の馬の仲の悪さは、御主人同志のあの仲の良さとは裏腹に犬猿の間柄でございました。二人の騎士はあまり裕福な身分ではございませんでしたので、各々が居を構えることなど至底叶わぬことでございました。ところが二頭の馬の犬猿もただならざる関係となりましたことから、二人の騎士は寝食を共にすることに不自由を来し、とても煩わしい日々を送らねばならなくなったのでございます。このような状態が続きましたので両名は我慢もこれまでと、御主君のドン・エンリケに事の次第を申し上げ、チュニス王が飼育なされているライオンの所へ両名の馬を放り出させていただきたい、と願い出たのでございます。

ドン・エンリケは両名の願いを心よくお引き受けになられ、チュニス王にお頼みになられました。かくして二頭の馬は御主人達からものの見事に報復されることになったのでございます。すなわち二頭の馬はライオンのいる囲い場の中へ入れられてしまったのでございます。

ところがライオンがまだ檻から姿を現わす前でございましたから、すぐさま二頭の馬は互いに相手を殺そうと激しく唾み合いを始めました。その時檻のとびらが開けられ囲い場にライオンが姿を現わしました。するとあれほど激しく唾み合っておりました二頭の馬は恐怖のあまりに身を震わせながら、互いに体を寄せ合い一つになりました。しかしそれもほんのひとときの間だけで、すぐさま猛然とライオンに立ち向うと、激しく咬みついたり、蹴ったりしては抵抗したものですから、ライオンはその余りの勢いにたじたじとなり、元の檻の中へ戻らねばならなかったほどでございました。協力し合ったことでライオンの攻撃を封じ込むことが出来た二頭の馬は共に無事でございました。この一件以来両馬はすっかり仲が良くなり、一つの飼葉桶から仲よく餌を食んだり、小さな厩で寝起を共にするようになりました。この和解は、ライオンへの強い恐れが引鉄となり、二頭の馬の間に生れたものでございます。

ところでルカノール伯爵様、御宿敵が新たなる強敵の出現を非常に危惧なされ、殿の御援助を仰がねば防御することの能はざることを熟知なさっておられますことから、お二人が交えておられます矛を納め、その上で殿の御援助を是が非でも仰ぎたいとの御意向であることを殿が御諒解なされますならば、私は二頭の馬が徐々に身を寄せ合うことで互いの恐を解消し、以後信頼し合う仲となりましたように、殿も徐々に御宿敵に信頼を寄せられ、心をお開きなさるべきであると考えます。その上で、これまでの御宿敵が常に信義に厚く誠実なお人柄で、いかなる時も決して二心なく、従って不意討を喰う恐が絶無であると御確信なされました暁には、援軍をお差し向けになることがお出来になられます。さすれば殿も、新たなる強敵に攻め落されることのなきよう、そのお方の御助力をお求めになられるのがよろしいのでございます。ですから、外敵に攻撃されないためには、御身内の方々並びに周囲の諸侯の方々にも、いざという時のことを慮って、御宿敵を受け入れさせねばならないのでございます。しかしながら、もし御宿敵が殿の御援助のお蔭で危難を免れ国が安泰となるや、殿に背き、弓を引く態度を取る様子がお分りになられますれば、ご援助なさることは愚かなことであり、出来るだけ身を遠ざけられるべきかと考えます。御宿敵は窮地にあっても、殿への敵意を持ち続けていることがお分りになられますれば、それは好機が到来するまでの間矛を納めているに過ぎず、殿の御援助を得て窮地を抜け出すまでは猫をかぶっている所存であると御心得おきいただきたいのでございます。」

伯爵はパトローニオの説明にとても満足され、有意義な助言であると判断された。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので、本書に記すことを命じた。そして次のような詩を作った。

外敵の攻撃を避けよ、
宿敵への備えが万全であるならば。

この物語はこれで終るが、話はさらに続く……

第十話　「貧しさのあまりに食物に事欠きはうちわ豆を食べた男に起った事について」

またある時、ルカノール伯爵はパトローニオと次のような話をしておられた。

「パトローニオ、予は身に余る恩恵を神から賜わっていることは百も承知だ。所領や面目はもとより、何もかもが今のところ申し分のない状態にあることもだ。しかしながら時折、生よりも死を願う気持に駆られるほど貧窮に陥ることがある。そこで、このような事態に陥った時、予の心の支えとなるものを授けてくれるように頼む。」

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは返答した。「そのような事態が殿に生じました時、必ずや殿の御心の慰めとなります物語、大長者であった二人の男に起きました事をお聴きいただきますれば申し分ございません。」

伯爵はそれがどのような話なのか聴かせてくれるようにお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトローニオは語り出した。「大長者のひとりが糊口を凌ぐ物が皆無となるほどの極貧に陥ったのでございます。八方手を尽して食物を探し求めましたが、手にすることが出来たのはたった一椀のはうちわ豆だけでございました。以前の栄耀栄華を憶い出すにつけ、空腹を抱えながらやっと手に入れた食物が、常なら食することなど思いもつかぬ、苦くて不味い乾涸びたはうちわ豆だけである己の有様を考えると、涙がどっと溢れ出ました。しかしあまりの空腹に耐えかねて、はうちわ豆を食べ始めたのでございます。涙を流しつつ男は豆を口に入れ、殻を後方へ捨てては己の不幸を嘆き悲しんでおりました。ところが、人の気配を背後に感じて振り向いて見ますと、何と彼が後方へ投げ捨てたはうちわ豆の殻を拾っては口に入れている男がいるではありませんか。その男は先程申し上げましたもうひとりの大長者だったのでございます。

はうちわ豆を食べている男はその光景を目にすると、何故殻を食べるのかと訊ねました。するとその男は、『以前は貴方よりもずっと上の長者ではありましたが、今では空腹を抱えていながら、食物に事欠く身の上なので、貴方が投げ捨てた殻を見つけた時はとても嬉しかったからです』と答えたのでございま

す。はうちわ豆を食べていた男はこれを聞くと安堵致しました。己よりも更に貧しい人のいることが分り、我身はまだしも恵まれていることを悟ったからでございます。これを契機に彼は懸命に努力致しました。その上に神も救いの手を差し伸べられましたから、遂にこの貧窮から抜け出す道を探り当て、再び前にもまして幸福になったのでございます。

ルカノール伯爵様、世の中とはこういうものでございます。われらが主なる神は、誰ひとりとして完全に総ての物を手に入れることが出来ぬのが善い、とお考えであることを御心得おきいただかねばなりませぬ。只今のところ、殿は神の恩恵を賜わられ、御領地も御面目も、それにその他の物も総て申し分ございませんが、しかし将来金子に事欠く逼迫した事態に差し迫られましても、悲観なされてはいけませぬ。殿よりもはるかに富に恵まれた御身分の高いお方でも、このような状態に陥られますれば、殿が臣下の方々にお与えになっておられます扶持に比して、ごくわずかな扶持しかお与えになれなくとも、与えられるだけの余裕があることにとても御満足なさることは明らかでございます。」

ルカノール伯爵はパトローニオの助言にとても満足され、安堵された。そして御自身の御努力により、その上神の御加護をも賜わられたのでこの窮地を見事に切り抜かれた。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたので、本書に記すことを命じた。そして次のような詩を作った。

貧しさに挫けるな
より貧しい者のいることを知れ。

この物語はこれで終るが、話をさらに続く……

注

①『要約年代記 La crónica abreviada』—『El libro del Conde』の序文の中で書名が記述されているだけで作品は現存しない。

②『賢者の書 El libro de los sabios』—右に同じ。Andrés Giménez Soler は『El libro de los estados』の中に編入されたと考えているが根拠は定かではない。

③『騎士道の書 El libro de la caballería』—右に同じ。しかし『El libro de los estados』の六十七章と八十五章の中でこの作品に関する記述が一部あり、又九十一章の中で『El libro del caballero y del escudero』と共に書名が記述されている。

④『王子の書 El libro del infante』—本書の冒頭でドン・ファンは『Libro del infante』或は『Libro de los estados』という題名を持つものである」と記述している。本書は二部から構成されていて、前者は俗人の身分について、後者は聖職者の身分について語る。物語の概要は、異教徒のモロバン王の子、ホアス王子に帝王学を教育するこ

とから成っており、賢者フリオがその任に当る。他に王子の養育係、騎士トゥリンが加わり、四人の対談者の〝質疑応答〟形式で構成されている。この形式やテーマは作者のオリジナルではなく、東洋の聖者伝である『バルラームとホサファト』がその範である。

⑤『騎士と従者の書 El libro del cavallero et del escudero』—本書の写本は完全な形で残っておらず、全体の三分の一に当る章が欠落している。物語の概要は、王に召されて宮廷に伺候するひとりの新米の騎士が、彼を教育することになる老騎士と出会うことに始まり、宮廷で騎士道を修めた後、再び老騎士の所へ戻り、様々なテーマで教育を受ける話である。「物語の構成は Ramón Lull の『Libre del Orde de Cavayleria』に由来するが、老騎士が教育する内容は作者のオリジナルである」と Andrés Giménez Soler は彼の有名なドン・ファン・マヌエル研究『Don Juan Manuel, biografía y estudio crítico (Zaragoza, 1932)』の第二部で述べている。

⑥『伯爵の書 El libro del Conde』—本翻訳の書である。

⑦『狩猟の書 El libro de la caça』—本書は鷹の世話、訓練、狩猟法、病気の鷹の治療法、獲物の豊富な場所などについて論じたものである。

⑧『武器の書 El libro de los engeños』—『El libro del Conde』の序文の中で書名が記述されているだけで作品は現存しない。

⑨『詞の書 El libro de los cantares』—右に同じ。

⑩ペニャフィエル Peñafiel—Madrid の北北西およそ二百五十粁の所にあり Valladlid 県に属す。この地に1318年宣教師のための修道院を建立。

⑪この物語はこれで終るが、話はさらに続く… Et la estoria deste eximplo es ésta que se sigue:—スペイン語文の意味するところが不明なので敢えてこのように訳した。

⑫『罪人の死を……』—翻訳の底本にした José Manuel Blecua 版の注では出典個所を Ezequiel, 32, 2: "Nolo mortem impii, sed convertatur impius a via sua et vivat," としているが、該当しない。